



みどり



100号 『認知症の人の思い』

2016年7月1日発行／編集責任者 田中 眞／毎月1日発行／群馬県藤岡市篠塚105-1

<http://www.shinozuka-hp.or.jp/center/>

「みどり」は無事に100号を迎えることができました。これもひとえに毎月の発行を楽しみにしていただいている皆様のご支援によるものです。また、時間を惜しまず充実した文章を執筆していただけてきた金子由夏先生・池田祥恵先生・当院スタッフの皆さんに感謝します。

記念すべき本号ですが、特別な企画はせず、いつもと変わらぬ話題提供をしたいと思えます。今回は認知症の人の気持ちについて自分なりに考えてみました。介護の参考になれば幸いです。

家に帰りたい

認知症の人、特にアルツハイマー型認知症やレビー小体型認知症の人は、しばしば家に帰りたいと真剣に訴えます。施設に入所しているなり、子供の家に引き取られた人ならこの帰宅願望はもっともなことと思えます。ところが、家族とともに長年住み慣れた家に暮らしているながら家に帰りたいと訴えることがよくあります。これは一体どうしてなのでしょう。

一般にアルツハイマー型認知症の人では最近の記憶から失われやすく、昔の記憶ほど失われにくいという原則があります。そんな記憶の世界に住んでいるのですから、記憶障害が進むにつれて何十年も昔の世界に生活しているように勘違いしても不思議ではありません。

そのような人に「お風呂には入っていますか」

と尋ねると、「はい、毎日薪を焚いて沸かしていますよ」とニコニコしながら答えてくれることがあります。嘘をついているわけではありません。この人は薪で風呂を沸かした40年前の記憶の世界に住んでいるのです。

そのような記憶障害をもつ人の伴侶はすでに他界しているかもしれませんし、よちよち歩きだったかわいい我が子はもはや中年です。子はまるで別人です。仮に昔から住んでいる家であっても、あの懐かしい家ではありません。その人にとってユートピアのような何の心配も不安もない居心地のよい住処は他にあるはず。そこに帰りたくなるのは当然といえます。

この帰宅願望は夕方から夜にかけて現れやすく、俗に夕暮れ症候群と呼ばれるものに含まれます。不安や軽いせん妄が生じやすい時間帯です。介護者も忙しいため気配りが薄らぎ、夕食前で空腹になりやすいことなどの要因が重なって帰宅願望が生じやすいのでしょう。

この症状にどのように対応したらよいのでしょうか。人それぞれですが、ここでは私の外来のご夫婦の場合を紹介します。認知症の夫が家に帰ると言い出したとき、言葉で止めても効果がないことを介護者である妻は理解していますし、手を引いて留めようとするると暴力沙汰になることも予見しています。「じゃあお父さん、私

も一緒に連れて行って」と、自ら車を運転し、夫を助手席に乗せて道案内をさせます。少々走ったところで、「暗くなって危ないし、おなかもすいたから帰ろうか」と言って穏やかに帰宅したそうです。この介護者である妻の知恵と忍耐力には脱帽です。

お金を盗られた

ついさっきのことを忘れやすいアルツハイマー型認知症の人に多いのですが、自分でしまった金品・財布・貴重品など、時には取るに足りないスリッパやティッシュペーパーなどが盗まれたと訴えることが頻繁にあります。これはもの盗られ妄想と言い、一種の被害妄想と考えられます。もの忘れが周囲から気づかれないほど軽い時期から起こることもあります。基本的にはもの忘れ・記憶障害が背景にあります。

以下は実際に外来で経験したお話です。一人暮らしの女性であり、泥棒にでも入られたら大変だと心配し、財布を普段より厳重にしまっておかなければいけないと考えたのでしょう。後になっていつもの引き出しを探しても見つかりません。近くに住む息子に連絡を取って、財布が盗まれたと告げます。直ちに警察に通報しようとするのですが説得されて息子の到着を待ちます。以前にも同様の経験をしている息子は押し入れの布団の間にある財布を容易に見つけました。

話はこれで大団円とはいきません。母は烈火のごとく怒ります。「やっぱりおまえだったのね。財布はなくなるし、キャッシュカードだっていつもと違う場所にある。自分で隠したんだから簡単に見つけられるわけだ。今までに盗ったお金を返してちょうだい」と叫びます。

もの盗られ妄想が現れるには、自身の記憶障害の自覚が薄いことを背景として、不安や孤独や不信感が存在することが強く影響します。先の例では、元来聡明でしっかりものであった母

は、記憶力低下の自覚はあるのですが、昔のままの自分であると信じようとしています。しかし、失敗が増えている事実にも不安があります。一人暮らしの孤独もあり、しっかりしなければという気負いもあり、物品管理にも気を遣います。不安、孤独、もの忘れのおぼろげな自覚が心の中で渦を巻いているように思えます。

そこで息子が易々と財布を発見してしまったときに、かつてからくすぶっていた不信感は爆発します。「息子が盗っていたのだ。これまでの自分の失敗も実は息子の仕業だったのだ」と結論づけても無理のない話です。このような状況で対応を間違えると、家族関係の崩壊につながります。同居のお嫁さんを犯人にしたために介護を受けられなくなる事例をしばしば経験します。その結果、絶縁状態に陥り、孤立無援の生活を余儀なくされる人は少なくありません。

では、この状況でどのように対応しましょうか。なかなか難しいのが実情です。一般にもの盗られ妄想の犯人に仕立て上げられた人は、一番熱心に認知症の人の面倒をみていて、認知症の人から最も信頼されていた人です。この点を家族・介護者に説明します。場合によっては予防的に症状が出る前からそのようなことが起こる可能性を話しておきます。そうすることで介護の自信を取り戻していただき、自分は犯人になっても大丈夫、これが介護の勲章であると認識し、受け入れていただくことにしています。

一方で、本人の不安や孤独を取り除く工夫をする必要があります。介護保険のサービス利用等により、人と接し会話する機会を増やすことや、環境を調整して本人の生活状況に最適化することを目指します。あまりに攻撃的である人やイライラしている場合には落ち着いてもらうための薬を使用することもあります。

(文責：田中 真)